

なるほど！うみはく

海の博物館の  
「海女の展示」リニューアル

市立海の博物館 電話 32 6006

市立海の博物館が進めていた「海女の展示」のリニューアルが完了しました。

昨年5月に「海女(Ama)に出逢えるまち 鳥羽・志摩」が日本遺産に選ばれたことによる国からの補助金を活用し、昨年夏から海の博物館の海女文化に関する展示のリニューアルを行ってきました。

展示は3月13日に完成しましたが、残念ながら新型コロナウイルスが感染の影響を受け、5月24日まで臨時休館となっていました。

その後、自粛解除の宣言に伴い、5月25日から海の博物館を開館し、新しい「海女の展示」をご覧いただけるようになりました。



正面玄関を入ると、展示場の天井から下ろしたタペストリーに海女が潜っていく姿が投影され、フナド海女が深さ10m以上の海に潜ってアワビをとっている姿や潜水を開始してから再び海面に浮上するまで約50秒間潜っている姿などをご覧いただくことができます。

また石鏡の海女が撮影した海女の目線で水中のアワビやサザエ、ナマコを探し、捕獲する映像をみることで、自分が潜っているような感覚で海女漁の体験をすることができます。さらに答志地区から寄贈していただいたチヨロ舟を使い、フナド海女の操業風景を再現した実物大の模型も展示場2階に配置し、分銅につかまって潜っていくフナド海女の姿も再現しました。

展示B棟の「鳥羽・志摩の海女」の展示コーナーでは、海女のいる漁村(全国の海女の分布図や鳥羽・志摩の海女のいる漁村の位置図)や海女



漁の歴史(年表や記録)、海女の魔除け(セーマン・ドーマンの印、貝紫染)、海女が捕獲する海産物(アワビや海藻類の実物など)、海女が使う道具(ノミ類など)、漁の取り決め(漁獲物による操業期間、寸棒各種)などの展示コーナーもリニューアルしました。

また、パネルも新しく作り直し、海女や海女漁に関するさまざまな情報を分かりやすく展示・紹介しました。

海の博物館の新しい「海女の展示」を見学していただき、鳥羽地方の海女漁についてぜひ理解を深めてください。



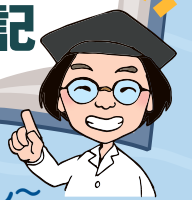
リニューアルした館内の様子

鳥羽・海藻文化革命  
岩尾博士の  
海藻博物記

vol.13

～ネジモクのはなし～

水産研究所 電話 25 3316



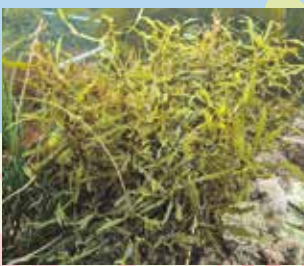
今春4月から鳥羽市水産研究所は、主な機能をこれまでの坂手島から小浜町に新設された建物に移した。この博物記にも少し変化を加えたい。

これまでは鳥羽に暮らす人なら見たり、食べたり、採ったりしたことのある海藻についてお話ししてきたが、これからはおそらく名前も知らず、見たこともなく、たとえ視界に入ったことがあっても注目することがなかったであろう海藻のお話をしようと思う。

まず手始めに、私が鳥羽の海藻で最も知ってほしい、かつ「市の海藻」としたい海藻であるネジモクを紹介しよう。ホンダワラ科の海藻である本種は紀伊半島の固有種であり、世界で



ねじれた枝先に付く生殖器床と気胞がある(メス)



水深1.5mに生育するネジモク

もここ紀伊半島にしか生育していないということだ。さらにいうと、紀伊半島の東側や和歌山県ですで見られなくなっており、尾鷲周辺でも見かけない。大きな群落があるのは、志摩市の片田麦崎と鳥羽市の石鏡町くらいである。

ネジモクの特徴として体長1m以上になり、付着器は円すい状で直径5cm程度、茎は直径3mmくらいの円柱状で数回短い間隔で分枝する。主枝の断面は三角形でねじれ、主枝下部の葉は基部が下向きに出ており、葉身は水平、線状披針形で先端は尖っている。

しかし多彩な特徴があるジャイアントパンダやコアラのような興味を引く特徴がない。掲載の写真を見てもらってもあまり印象には残らないだろう。それでも興味を持ってほしい。なぜなら、鳥羽の石鏡は世界有数の本種の生育地で、菅島はその生育北限のだから。